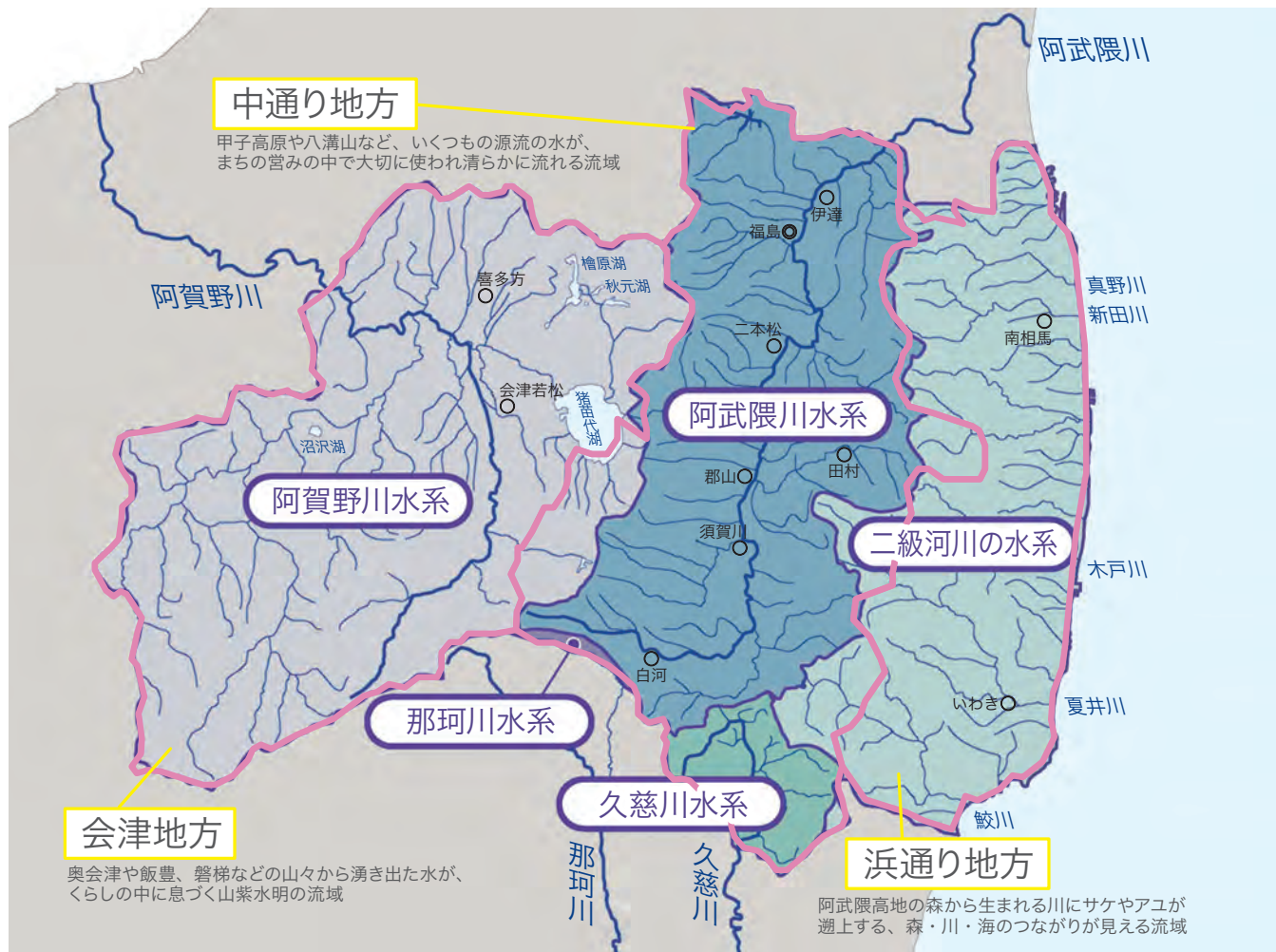




福島県を流域や水系の特徴によって分けた「会津地方」「中通り地方」「浜通り地方」

case
12

計画策定の事例
福島県

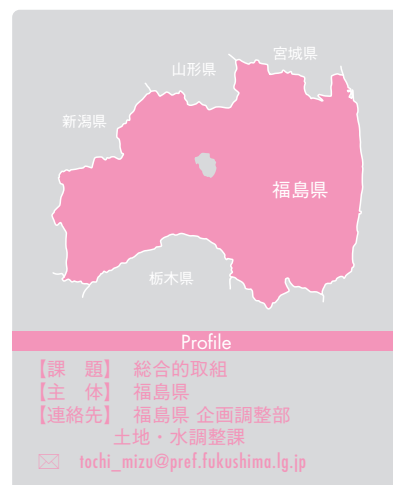
連携による健全な水循環の継承

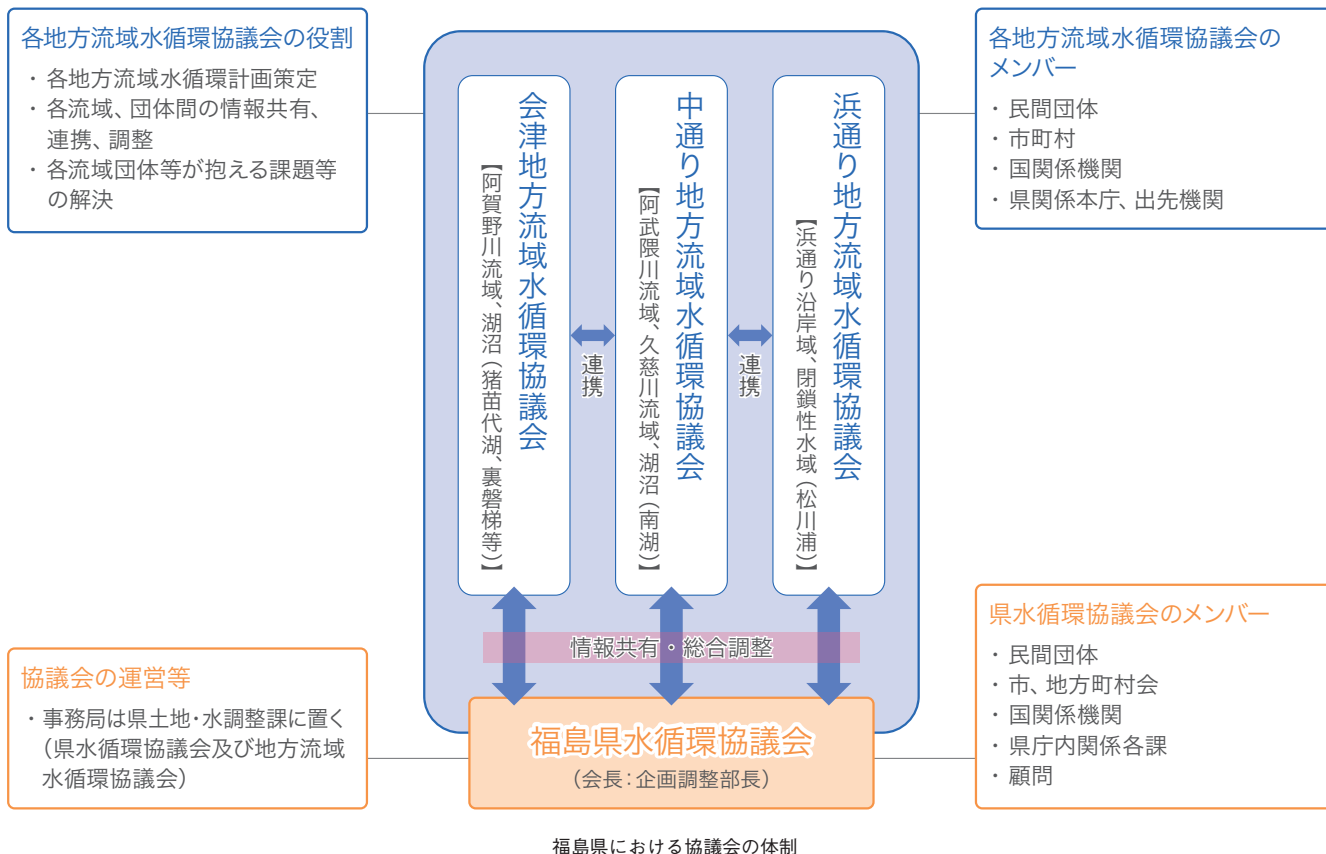
水に学び、水とともに生きる

「源流県」ふくしま

福島県は、水源をかん養する豊かな森林と、多くの河川や湖沼、湧水等の豊かな水環境に恵まれています。河川の水源のほとんどが県内にある「源流県」となり、水との関わり方が下流の県や海に直接影響する点からも、源流県としての果たす責任は大

福島県では、2006年に高度経済成長期の代償で悪化した県内の河川の水環境について、50年前のように子どもたちが川遊びできる環境を取り戻すことを目標に、うつくしま「水との共生」プランが策定されました。さらに、2017年4月には、「福島県水循環協議会」を立ち上げ、流域単位での上中下流の連携を強め、水質保全の取組の一層の推進を図られています。





50年前の水とくらしを取り戻す

きいものがあります。しかしながら、高度経済成長期の代償で悪化した水環境や、近年の地球環境の変化の影響により、福島県の健全な水循環・水環境が阻害されていることが懸念されています。

ネットワーク重視の取組開始

福島県では「うつくしま水との共生プラン」を実現するため、各団体がそれぞれのフィールドで活動してきた体制を一新し、関係機関の密接な連携に基づく推進体制が不可欠と考え、2017年4月28日に全県域を対象とした「福島県水循環協議会」を設立しています。設立初年度にあたる2017年度は、①水質保全、②環境教育、③環境保全、④総合調整といった課題に取り組んでおり、各活動団体の取組状況等の情報共有を図ることで、水循環施策の普及・発展へとつなげていきます。

3地方の特徴をいかす

福島県は「会津地方」、「中通り地方」、「浜通り地方」といった、流域や水系の特徴によって3つの地方に分けられます。3つの地方が抱える「水」に関する具体的な課題を把握し、共有し、解決を図ることを目的とし、

2017年10月に福島県水循環協議会の下、3地方それぞれに「地方流域水循環協議会」が設立されました。地方流域水循環協議会は、地元の活動団体、市町村、国、県によって構成されています。また、2019年2月には、各地方の課題解決を図るための重点施策を設定し、3つの地方ごとに「流域水循環計画」が策定されました。この計画の下、各地方の流域住民の水循環に対する意識が向上し、各団体の活動がより活発化することが期待されています。



① かつてよく見られた親子で川遊びをする姿（いわき市小玉川）

流域マネジメント、ここが「鍵」

「鍵」その1
うつくしま「水との共生」
プランの復活

福島県では、これまでの治水や利水、環境保全といった従来の縦割りの施策ではなく、産・学・民・官が幅広く連携し実践的に問題の解決を図る「うつくしま『水との共生』プラン」を2006年7月に策定しました。本プランでは実践的取組の方針として3つの柱を掲げており、方針に基づく施策の推進により、50年前のような水と人との身近で良好な関係を取り戻し、次世代への「健全な

水循環」の継承を目指していました。

ところが、2011年3月の東日本大震災により受けた大打撃によ

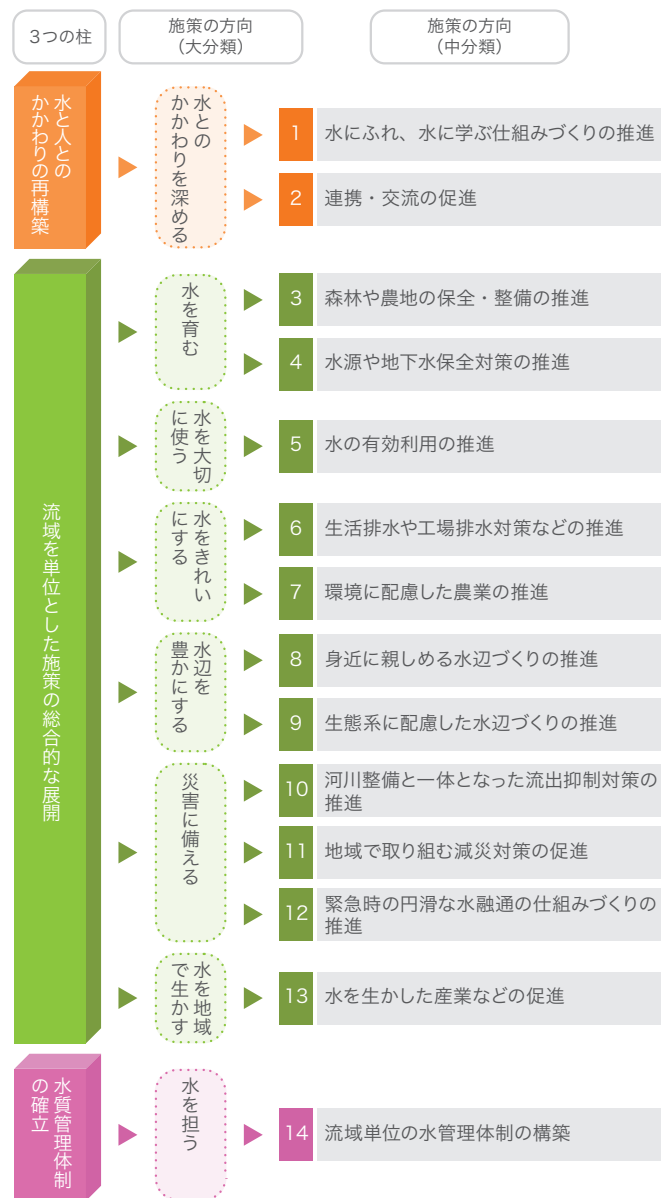
り、復興に専念せざるを得ず、うつくしま「水との共生」プランで掲げた計画が頓挫した状態が続きました。その後、震災から約4年後にあたる2015年の水循環基本計画閣議決定を機に、同プランで掲げた3つの方針を実現するため、各地方流域協議会を立ち上げ、各地方流域水循環計画を策定し、各流域の課題解決に向けて取り組んでいるところです。

「鍵」その2
コーディネート
による密な連携

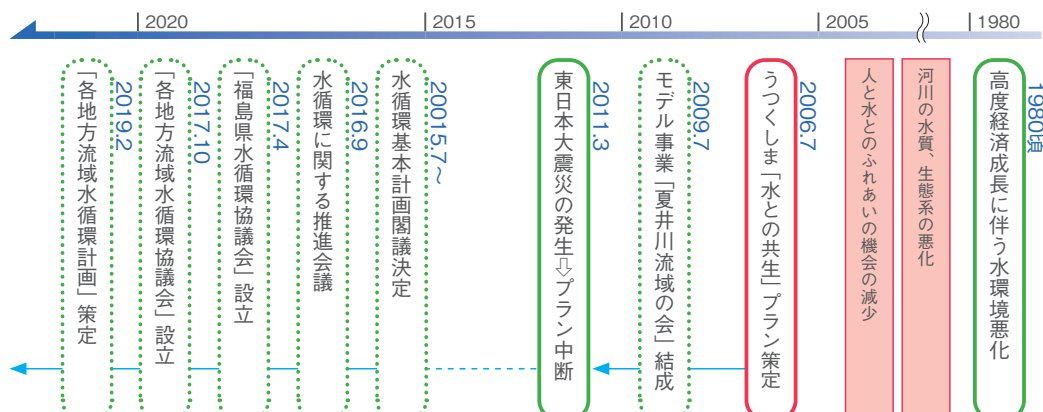
福島県水循環協議会では、「総合調整」こそが最重要事項として認識されています。各地方流域協議会においても、関係者が連携を密にし、情報共有を図りながら、各団体が抱える課題について多面的に対応していくことで継続的な活動へとつなげようとする方針です。2017年10月に行われた地方流域協議会の場においても、各活動団体から、活動内容や地域特有の課題、将来の目標に関

これまでの取組

福島県では、高度経済成長期に悪化した県内の河川の水環境の回復を目的に、うつくしま「水との共生」プランが策定されました。さらに、2017年4月には、「福島県水循環協議会」を立ち上げ、流域単位での上中下流の連携を強め、水質保全の取組のいっそうの推進が図られています。



うつくしま「水との共生」プランの3つの柱と体系図



Before—(今までの取り組み)—

個別の活動

行政

福島県企画調整部土地・水調整課
・出前講座の実施
・水環境ニュースの発行

福島県生活環境部
・猪苗代湖の水質調査、
水質悪化抑制対策の実施
・せせらぎスクールの実施

福島県土木部
・河川環境の保全
(清掃活動等)

など

団体 (NPO等)

・水草回収
・ゴミ拾い活動

など

課題の共有が不足

After—(福島県水循環協議会設置後)—

情報共有・連携

福島県水循環協議会

【総合調整機能（事務局：福島県土地・水調整課）】

団体
(NPO等)

連携強化・情報共有

活動への支援依頼／施策提案

活動への多面的な支援

行政
(県・市町村)

1. 水質浄化 (県内の河川、湖沼の水質浄化)
2. 教育 (環境教育の促進、節水意識の向上等)
3. 河川の環境保全 (清掃活動等への支援等)
4. 総合調整 (県の窓口機能の強化)

など

課題の共有 + 活動の強化

福島県水循環協議会設置による体制の強化



- ② 中通り地方流域水循環協議会の様子
③ 水生生物調査に熱心に取り組む
④ 26時間水質調査の取組の様子 (夜間)

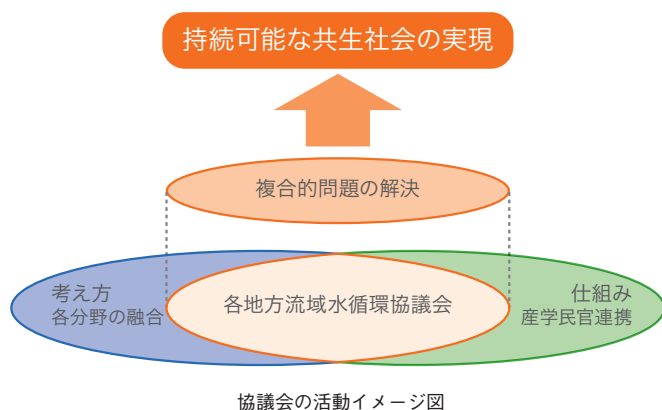
うつくしま「水との共生」プランにおける、流域単位での「産・学・民・官」連携による組織化のモデル事業として、浜通り地方の夏井川が選定されています。モデルケースとなった夏井川では、上・中・下流域の各団体の連携により「夏井川流域の会」が2007年9月に結成されました。夏井川流域の会では「夏井川アクションプラン21」を策定し、「みんなで見て、みんなで学び、みんなで

「鍵」そのふるさとの川、夏井川
笑顔はじける、

して積極的な意見や要望が述べられており、福島県によるコーディネートにより、各団体、市町村、国の間で有用な情報共有が図られました。

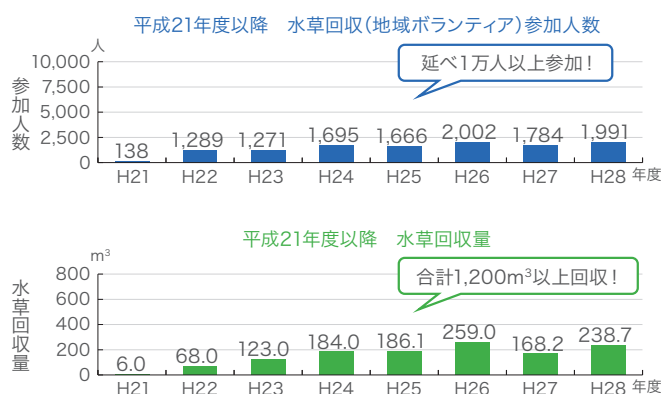
考え、みんなで実践していく」をモットーとした活動を10年にもわたり継続的に実施しています。夏井川の上流から下流までの27地点で同日同時間帯に採水を行い、流域内での水質の差異を調査する「夏井川一斉水質調査」や、指標生物により水質判定を行う「水生生物調査」、水の流れを体感してもらう「夏井川かわくだり」を実施する等、地域住民との間で活発な活動が展開されています。こうした継続的な取組を通して、地域一体での流域活動の情報発信や河川環境保全への提言がなされています。

福島県の、ここにも「注目」



各地方流域水循環協議会では、水に関わる多様で複雑な問題を解決するため、流域に関わる住民、団体、事業者、教育・研究機関及び行政機関など、多くの関係者が水循環に関する様々な情報を共有しながら、健全な水循環の回復とその承継を目指します。

注目1
産・学・民・官の連携



全国的にも有名な福島県の豊かな水環境の代名詞でもある阿武隈川や猪苗代湖においても地域と連携した多岐にわたる施策が実施されています。阿武隈川の河川環境保全の推進を目的として1994年に発足した「阿武隈川サミット」では、河

注目2
地域連携による
さまざまな水環境保全

福島県では、県内の水環境活動団体が一同に会し、地域・流域間の活動報告、情報交換や今後の活動への助言を行うことを目的とした「福島県水環境活動団体交流会」を定期的に開催しています。さらに、活動団体自ら同交流会を全国規模に拡大し、新潟県や山口県等の全国12県を交えた「全国河川愛護団体交流会」においても中心的な役割を果たしており、県内外への交流を進展させています。2017年度も11月11日・12日に山口県を舞台に第17回交流会が実施されました。

注目3
福島県から
全国規模にも展開!

口クリーンアップ作戦、上中下流児童交流会等の小学生や地域を対象とした事業が行われてきました。猪苗代湖では、水質日本一を目指し、水質調査を取り入れた環境学習や、2009年以降延べ1万人以上の参加人数を誇る地域ボランティアによる水草回収など、猪苗代湖の水環境保全に貢献してきました。



⑤猪苗代湖(鬼沼)で清掃活動をする子どもたち ⑥猪苗代湖で水質バックテストをする子どもたち ⑦全国河川愛護団体交流会での様子(荒川自然林園にて)

Key Person



[夏井川の活動を発信する]

福島県水環境活動団体交流会 代表世話人
夏井川流域の会代表 副代表世話人

たかはし むねひこ
高橋 宗彦さん

略歴 小野町在住。1951年生まれ。地域づくり活動に積極的に参加すると共に、夏井川友の会の会長として、夏井川流域の上下流の交流や、親水活動、環境学習など、水環境保全活動に尽力されている。



活動を軌道に乗せるコツは？

最初は地域で個々に活動していた団体（スポーツ少年団やライオンズ倶楽部等）を組織化して「夏井川友の会」を立ち上げました。活動の資金は補助金等をあてにせず、各団体単位で会費を徴収することで、ある意味、自律して活動を継続してきました。自律しながらみんなで一つのことを楽しい顔でやるのが継続のコツだと思います。

今後解決が必要な課題は？

長くやっているのでメンバーが高齢化しつつあります。地域には若い人たちが構成された青年部などもあるので、将来的には協働していきたいと思っています。

活動をしていてうれしいことは？

活動を通しての出会い、ネットワークの広がりを肌で感じることです。とくに全国河川愛護団体交流会を通して、山口県や新潟県等の全国の河川環境に対して同じ志を持つ方々と意見交換し、現地を一緒に見て回り、交流できることに喜びを感じます。

Key Person



[夏井川の流域連携を支える]

福島工業高等専門学校 名誉教授
夏井川流域の会代表 代表世話人

はしもと こういち
橋本 孝一さん

略歴 いわき市在住。1948年生まれ。地域の環境保全活動を積極的に支援すると共に、夏井川流域住民による川づくり連絡会の代表世話人として、夏井川流域の上下流の交流や、親水活動、環境学習など水環境保全活動に尽力されている。



10年間活動が継続できているポイントとは？

行政頼みになると、河川管理の担当者が異動し、活動やその思想が途絶えてしまい長続きしません。どのようにして地域を巻き込むか、輪を広げていくかが重要だと思います。私たちは、毎月第1火曜に世話人会を実施し、輪を広げる努力をしてきました。それが結果的に継続につながっていると思います。活動を継続するには、地域の輪を広げつつ、役割を分担し、情報を共有していくことが大事だと思います。

最も苦労されていることは？

スタッフ集めがとても大変です。夏井川では毎年26時間一斉水質調査を実施していますが、子どもたちの保護者から協力の承諾を得るのに苦労します。高専の学生にも協力を依頼し、活動を継続しています。

活動をしていてうれしいことは？

子どもたちに水を体感・体験してもらい、その中で子どもたちが声をあげ、感動している姿を見ることが一番うれしいです。

